

故郷第五場面 読んだ読んだ

三年四組

氏名

ある寒い日の午後、わたしは食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、振り向いてみた。思わずあつと声が出なかった。……わたしは身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。わたしは口がきけなかった。



主人公は、訪ねてきたルントウを見て、その過酷な生活を察してしまった。また、突然の訪問であったこと、その変化ぶりに衝撃を受け、冷静さを失っている様子が読み取れる。ヤンおぼさんの時とは違い、ルントウの容姿、発言に強い衝撃を受けていることから、ルントウへの思いが強かったことも分かる。また、ルントウも、同じく、昔のように親しく話せないことに寂しさを感じている。

くん

ルントウを見て主人公がしつかり声が出なかったのは、驚いた、うれしかったの他に、ヤンおぼさんのように見た目がすぐく変わっていたため、ヤンおぼさんのように中味も変わっていたらどうしようと思っていたから、引越し間近の主人公にルントウが会いに来たのは、ヤンのように何かをもらうためではなく、本当の主人公が遠くに行ってしまう前に、もう一度会いたいと心から思っていたから。

さん

ある日、一目でルントウと分かったものの、昔の生き生きとしたルントウではなく、みすぼらしく、主人公出ないと分からないくらい変わってしまったルントウが来た。主人公はやつと会えて、言いたいことがひとつなぎになってしまい、長い年月にせき止められたように口から出なかった。ルントウの「だんな様」から、本来の身分の違いを改めて思い知らされた。

さん

ある寒い日に、待ちに待ったルントウがようやくやくやくしてきた。急いで立ち上がって迎えるほど会いたかったルントウの姿には、昔の生き生きとした様子はなかった。顔も手も着ているものも、みすぼらしく変わり果てたルントウに主人公は言葉が見つからなかった。「だんな様!」。その言葉が主人公とルントウを身分の厚い壁で引き離れた。ショックと深い悲しみのあまり、主人公は身震いまでするのだった。

さん

主人公はルントウに会って感激で胸がいっぱいになったが、ルントウは昔のように生き生きとしておらず、とてもみすぼらしい格好をしていてそのあまりの変わりように主人公はふさわしい言葉が見つからなかった。そこでルントウに「だんな様!」と言われたとき、主人公とルントウの、変わることはないだろうと思っていた関係が崩れ、上下関係があらわになってしまった。

さん